

皮革と石灰

株式会社 バルクワールド 川 添 洋

皮革を作る工程で石灰が使われている事を知っている人は多いと思います。ホームページ『そうか革職人会』に依れば、“皮”を“革”に変えるには皮鞣しが不可欠で、その皮鞣しとは、“鞣”の字が語る如く、“革を柔らかく”すると共に、皮が持つ腐敗性や硬化性を防ぐ事が必要で、その皮を革に変えて安定化させるには“タンニン”や“クロム”、日本



では“ナタネ油”や“動物の脳漿”等の鞣し剤を皮のコラーゲン繊維に浸透させる事で革とするとあります。そして、石灰の使用用途については、一連の鞣し工程の前に、原皮を消石灰やソーダで作った石灰乳、つまり、pH13程の強アルカリ液に2日以上漬けて“毛・脂肪・表皮層”を分解除去し、又、皮を柔らかくする事で鞣しを円滑に行うのに石灰を使用するとあり、その石灰漬け工程は普通2度に分けて行われます。

自分の体験から言えば皮革の腐敗性や硬化性をなくす“鞣し”はとても大事で、旅先の夜店で買った小物(写真)がいつのまにか水気を吸って臭気を発散して周りの人から変な目で見られて閉口した上に、その柔らかい触感が消えて硬化し使いづらくなったので、この鞣しの良し悪しが皮革のキーポイントである事は充分理解できます。

さて、本多勝一氏は『カナダ・エスキモー』で、この鞣しの不十分さから起こるエスキモーの妻たちの日常生活の大変さを次の様に描いています。雪の中の狩猟で湿ってクシャクシャになった男達の履いた靴はランプの上で干されて翌日には乾きますが、『このクツはまだなめし方がたりないので、石のように堅くなってしまふ。すると彼女は、堅い部分を歯でかんで柔らかくしてくれる。この「かむ」という作業。これこそ、主婦たちの最大の仕事だ。…ズボンもクツも手袋も、すべて毛皮をなめしてつくる。なめす方法が「かむ」ことだ。(妻の)オカンゴは、九人の衣類の面倒をみなければならぬ。かくて彼女は、ひまさえあれば皮をかみつづけることになる。…この部落を含めて、

イグルーリック・エスキモーは専らかむことを伝統にしているが、小便、魚の卵、柳の樹皮を煎じた湯、動物の脳みそなどでなめすエスキモーもある。』とあります。このように皮革の鞣し方は地域や習俗に依ってそれぞれ違いがあり、例えば、ローズマリ・サトクリフ氏の『太陽の戦士』にはオオカミの皮の鞣し方について、『オオカミの皮は、塩の中に薬草をつき入れたものをまぶして地面の上に干して…それに灰色のガチョウの脂肪をぬり、最上等のシカ皮のようにしなやかになるまでなめす…』とイングランドの事例を記しています。

処で、鞣しの前工程に石灰を用いたのはいつ頃からの事でしょうか。それは定かではありませんが、そのヒントとなるものに羊皮紙があります。羊皮紙はパピルス紙と並び紀元前2500年前には既に使用されていたようですが、紀元前5世紀のギリシャのヘロドトスは『多くの蛮族はそのような皮(羊や山羊の皮)に文字を書く。』とイオニア地方(トルコ・イズミール周辺)の慣習を記し、又、紀元前2世紀にペルガモンで図書館が建設された時にはパピルス紙の購入が出来ず羊皮紙が発明された…との記録がプリニウスの『博物誌』に残っています。尚、その羊皮紙の製法が12世紀のラテン語文献に残っていて、『水槽に新しい水と消石灰をいれ、よくかき混ぜて白濁液を作る。原毛を毛がついた方を外側にして半分にたたんでこの液に浸す…』とありますから、大量の紙を必要としたニーズの前に、地中海沿岸域にふんだんにある石灰を使う製法が確立したと推測できそうです。さて、余談ながら、羊皮紙は紙より丈夫で耐久性がある事から、イギリスでは現在でも公文書に羊皮紙が使われており、2011年のウイリアム皇子とキャサリン妃の結婚証明書は羊皮紙に記されています。

尚、日本の皮革では甲州印伝や播州白鞣革が有名ですが、甲州印伝の場合は鹿皮を脳漿で鞣し、播州では牛皮でのナタネ油での鞣しです。又、中国の『天工開物』にも裘(毛皮服)を作るにあたっては紙の製法と異なり石灰を使うとは書いていないので、おそらく、皮革での石灰の使用は西洋で培われた技術と思われる。